

2017年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2017年度の学会賞が決定し、第65回秋季大会期間中の2017年10月21日に、首都大学東京南大沢キャンパスにおいて授賞式が行われました。

学術賞（単著部門）として岩田 正美 会員が選ばれ、奨励賞（論文部門）としては、鈴木 浩之会員が選ばれました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



左から黒木副会長、鈴木会員、岩田会員、古川委員長

◆ 学術賞（単著部門） 岩田 正美

受賞作：『社会福祉のトポス—社会福祉の新たな解釈を求めて』

（有斐閣、2016年1月15日刊）

本学会の会員の多くにとって、教員として「教える科目」は、自分自身の研究テーマと一致しないのが普通であろう。私自身も、長い教員生活の中で研究テーマにそった授業を行うことは希であった。大学教員として、学部で最も長く教えてきたのは「社会福祉原（理）論」である。これは現在の資格制度のカリキュラムにはないが、社会福祉とは何かを問う基幹的な科目として位置づけるか、あるいは全教員がオムニバスで行う総論のような位置づけにおかれてきたものといえる。私自身は、学生時代に一番ヶ瀬康子先生の原論の授業を受けたが、結局「社会福祉とは何か」がよくわからないままに卒業し、研究の途に進んだ。したがって、この授業担当は、学生時代の素朴な疑問を自分自身に突きつけるようなもので、毎年授業の組み立てや内容に悩み、準備にかなりの時間を費やした。その一部を研究ノートの小論文にまとめることはあったが、私自身の社会福祉理論をまとめるには至らなかった。

それが、定年退職が迫ってきた頃、急に「卒業論文」として社会福祉論をまとめなければならぬという考えに取り付かれた。しかも、戦後日本の社会福祉の「事実」をなんらかの集合として括りながら考察する実証的なものにしたいという気持ちが強くなり、白書を使った実証方法や論文編成が頭を占領するようになった。今から振り返ると、定年間際の忙しい最中に、よくまあ、こうした作業をしたものだと思う。「社会福祉とは何か」という疑問へ、研究生活を通して得た多様な手法を動員して取り組みたいという思いが勝ったのかもしれない。

その意味で、この書を日本社会福祉学会の学会賞に選定していただいたことは、大変うれしかった。すでに引退途上の私が受賞して良いのかという迷いもあったが、老若男女すべての会員が、社会福祉研究を高めて行くことに貢献するという意味に解して、ありがたくお受けした。膨大な表を含めて、本書を精読して頂いた審査委員会の先生方には深く御礼申し上げたい。

◆ 奨励賞（論文部門） 鈴木 浩之（神奈川県中央児童相談所）

受賞作：『子ども虐待に伴う不本意な一時保護を経験した保護者の「折り合い」のプロセスと構造 —子ども虐待ソーシャルワークにおける「協働」関係の構築—』
（『社会福祉学』第 57 巻 2 号掲載 2016 年 8 月 31 日刊）

私は児童相談所の現場に長く勤めています。毎日繰り返される通告に対応し、そこにある家族の小さなサインを見逃さないことが私たちに課せられた使命です。そして、そこに危険があれば、私たちは職権で子どもを保護者の意思に反してでも一時保護します。不本意な一時保護をされた保護者の嘆き、怒り、悲しみは、ときに児童相談所への攻撃となり、保護者と対峙することから「子どもの安全」を探していくことになります。

この局面で、どうすれば保護者と「子どもの安全」を共有できるのかが実践者としての課題でした。子ども虐待対応はその性格上、パターンリスティックな対応であることは否めません。しかし、子どもの安全が真に守られるためにはいつかは保護者が主体者となる必要がありました。私たちは実践者の立場から保護者との「協働」を考えたのですが、このことが保護者の本当の体験かはよくわかりません。であるなら、保護者から直接、児童相談所との協働について教えていただくことはできないかと考えました。この実践的課題が研究動機でした。しかし、児童相談所に少なくない怒りを持っている保護者から話を聴くことは、簡単ではありません。また、保護者にあえて児童相談所への思いを聴いて、怒りの残り火を煽ることもないというのも、当然のことです。しかし、

現場にいるからこそできる研究でもありました。

研究では「折り合い」というコアコンセプトが創出され、保護者が困難な現実に「折り合う」ためには6つの要件があることが示唆されました。そして、この研究は、その後、支援者インタビューの分析との統合、量的調査とのトライアングレーションへと発展していきました。

改めてインタビューに応じてくださったご家族、研究を許可してくれた神奈川県児童相談所に感謝申し上げます。また、インタビューの分析は、グラウンデッド・セオリーに基づき、東洋大学の志村健一先生をはじめ、志村ゼミの皆さんから貴重な助言をいただきました。多くの方のサポートがあった論文だからこそ、このような形で認めてくださったことにひとしおの喜びを感じます。ありがとうございました。